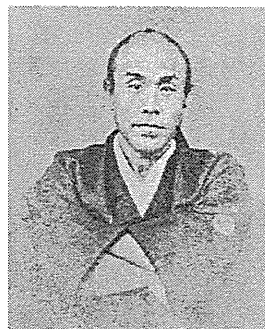


近代日本の幕開けに活躍した人物を明治維新 150年（平成30年）の大河ドラマに

1 現代に通じる由利公正



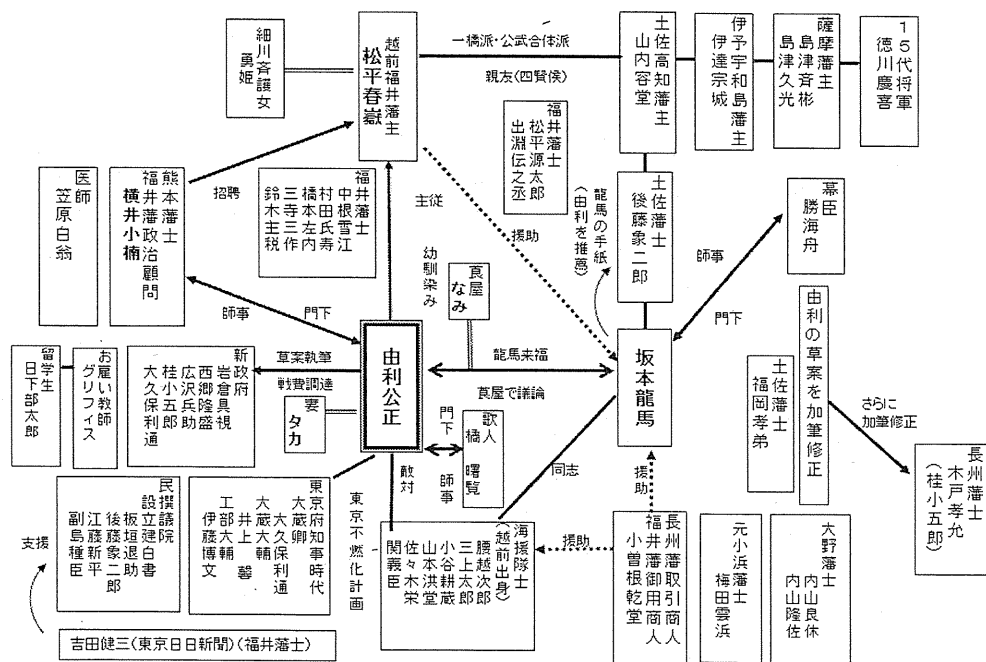
- 由利は、福井藩と国の両方で活躍した人物であり、地方出自の人材の活躍により国が発展することは、今日の地方創生の目指す姿に通じるものである。
- 由利財政の柱の一つは各地の殖産であり、地方を豊かにすることで国を豊かにすることが構想されていた。由利の構想は今日の我が国の目指すべき方向と一致する。
- 由利公正こそ明治維新150年の大河ドラマの主人公にふさわしい。

【由利公正の略歴】

生没：文政12年（1829）～明治42年（1909） 幕末の福井藩士。明治維新まで三岡八郎を名乗る。

- ・文政12年（1829）、福井城下毛矢に生まれる。
- ・福井に来遊した横井小楠の学問に影響を受け、藩財政を研究。殖産興業策を進め、藩財政を黒字化した。
- ・慶応3年（1867）、坂本龍馬が、新政府への参画を求め来訪。その後、明治新政府に徴士参与として登用
- ・明治元年（1868）、「五箇条の御誓文」の草案を起草。同年、太政官札を発行。従四位下に叙せられる。
- ・維新後は新政府の参与となり、財政を担当
- ・明治4年（1871）には、廃藩置県後の初代東京府知事となり、翌年、岩倉欧米視察団に随行
- ・その後、元老院議員、貴族院議員を務める。勲一等を賜る。
- ・81歳で没。

【由利公正を取り巻く人物】



2 明治維新における由利公正の業績

明治維新の立て役者は西郷隆盛や木戸孝允達ということになっている。しかし、明治維新を支えた一番の功労者は由利公正ではないだろうか。

由利は五箇条の御誓文の起草者である。御誓文は以後、明治維新の指導精神として、近代国家建設のさまざまな施策に受け継がれた。また太政官札を発行し新政府の運営費を賄った。

①五箇条の御誓文の起草

坂本龍馬が新政府の方針として創った「船中八策」をさらに吟味し、「議事之体大意」を著した。「議事之体大意」は、明治元年3月14日、新政府が公布した国家の基本方針＝「五箇条の御誓文」の原型となった。

②太政官札の発行

わが国最初の全国通用紙幣、太政官札の発行を建議し、慶応4年（明治元年）5月から明治2年7月まで発行する。これにより明治政府の殖産興業諸改革の莫大な費用は賄われ、国家経済は成長路線に乗り、廃藩置県や地租改正も可能になった。

③殖産興業政策の推進

府知事時代、明治5年5月から翌6年2月まで、欧米視察に参加した際、絹布見本数種を持ち帰り、廃藩置県後機業にかかわっていた旧福井藩士に渡し、従来の越前奉書紬の品質改良を促した。福井において繊維産業が隆盛を誇るきっかけとなる。

④東京不燃化計画の策定・実行

東京府知事任命後発生した明治5年2月の大火で約5千戸、28万余坪を焼失したことを受け、抜本的な都市改造が必要だと考え、街路を広くすることや、不燃性の煉瓦建築にするなど大規模な不燃性都市化計画を提案、実現させた。

⑤民撰議院設立の建白

明治7年1月、板垣退助、副島種臣、江藤新平らとともに、民撰議院の設立建白を行う。

由利公正(三岡八郎)をめぐるエピソード集

1 由利公正の人となり

①新型「へっつい(かまど)」の考案者



幽閉蟄居を命ぜられている4年4カ月の間に、かつて葦山反射炉で学んだ技術を応用し、炎の熱を逃さず、土の中に埋めることで保温力を増す新型「へっつい」を考案。従来の「へっつい」よりはるかに燃料が節約でき、しかも火力が強い。考案された「へっつい」は、昭和十年まで「三岡へっつい」とよばれて福井県下で用いられていた。

②愛妻と幼馴染み

8歳年下の「タカ」は由利が49年連れ添う愛妻。また坂本龍馬との会談場所となった旅館「たばこ屋」の娘「なみ」とは幼馴染として生涯の付き合いとなった。

③乗馬の名手



陣傘陣羽織に着飾った青年藩士が、馬にまたがり城下を疾走する中、町民や農民の若者が、鐘や太鼓をならして馬を威し、行く手を阻み、勇猛果敢な攻防戦を繰り広げる福井藩名物の「馬威し」に19歳で見事優勝。松平春嶽の目に留まる。

馬威しの様子。独特の衣装と装具で馬の前に立ち、はだか「名物男」(中央)。大勢の見物客が見入っている

④文武両道

剣道は真影流、槍は無辺流、西洋流の新式砲術それぞれ免許皆伝の腕前。馬威しの勝利をねたんだ上級武士の師弟数名から切りかけられた際も、竹竿をやりに見立て撃退する。

日頃の武術の鍛錬の結果、剛健な体力を身に付ける。ペリー艦隊の2度目の来航の際、福井藩が先遣隊を江戸に出した際、昼夜兼行わずか3日間で全道程を踏破する。

また、幕末を代表する歌人橋曙覧の門下生として、短歌も学んだ。

⑤信念や信条をあくまで貫く頑固者

明治元年、古くからの金貨通用の地である東京では太政官札発行は無理だとして、反対していた江藤新平に対し、由利は、議論を拒否したら負けというルールを設け、立会人を置き、朝から夕刻まで、連日7日間江藤と議論を戦わせた。8日目に江藤は会場に姿を現さず、由利の勝ちとなった。

2 各地の由利公正エピソード

【福井】

①毛矢侍(けやざむらい)と「幸橋」



幸橋南詰上流側に整備された由利公正広場

福井城下の毛矢町は、旧松岡藩から移住した禄高の低い中下級武士の住宅地であり、三岡家をはじめとする居住者は「毛矢侍」と称された。

毛矢町から足羽川への架橋が望まれたが、防衛上の観点から認められず、毛矢侍が城へ出仕する際には、兩岸に渡した綱を手繰って往来する「繰り舟」を用いていた。

由利が藩の要職に抜擢された文久2年(1862年)にようやく悲願であった架橋が実現。毛矢侍はその喜びから「幸橋」と命名した。

②坂本龍馬が二人?



坂本龍馬

昨年発見され、全国的なニュースとなった坂本龍馬から後藤象二郎に宛て手紙には新政府の財政担当者に由利を推す旨の記載がある。

由利と坂本龍馬とは大変気が合う仲で、龍馬二度目の福井来訪時、足羽川近くの山町のたばこ屋旅館にて、早朝から深夜まで延々日本の将来を語り合った。当時、謹慎中の公正には立会人として藩士が付き添ったにもかかわらず、龍馬は遠慮せずに「三岡、話すことが山ほどあるぜよ」と叫んだと伝えられる。

五箇条の御誓文の原文となった「議事之体大意」は龍馬の「船中八策」と思想的な基本が共通している。

龍馬が福井を離れてから10日後、家老の家に招かれた由利は、帰り道、懐中に忍ばせていた龍馬の写真が無くなっていることに気付く。胸騒ぎがしたその2日後、龍馬の死を知ることとなる。

【熊本】

横井小楠との運命的な出会い



横井小楠

横井小楠の教えに従って、福井藩でも産業奨励を行うことになり、その責任者に由利が選ばれる。由利は「あいつは銭勘定ばかり堪能で、武士にあるまじき振る舞いをしている」と周囲から馬鹿にされてきたが、小楠の出現により、これまでの由利に対する批判が一変する。

小楠が、福井へ赴いた年、弟死亡の知らせで一時帰国することとなった際、由利も熊本に同行し、毎夜、小楠と酒を酌み交わし議論を行った。この3年後、由利は再度熊本に小楠を訪ねている。

【長崎・横浜】

長崎、横浜に福井のアンテナショップ

由利は長崎に四度出張している。安政5年、物産を興し通商貿易を行って収入を図るよう中根雪江や橋本左内に働きかけ、貿易資本の確保と貿易状況の視察を建議し採用される。

その後長崎に出張し、唐物商、小曾根乾堂の協力を得て、同所浪ノ平に越前蔵屋敷を設けた。そののち長崎江戸町に福井屋が開設され、そこを拠点に生糸などの輸出が行われる。同じように横浜にも出店が設けられ、販路開拓が図られた。

【京都・大阪】

紙幣発行のため、京都、大坂で資金集め

明治新政府は徳川慶喜追討のため、御用金（会計基立金）を集める必要に迫られ、由利がその責任者となる。明治元年、由利は京都の大商人に5万両、大坂の大商人に同じく5万両の調達を命じる。計10万両の御親征費が調達される。

その後、紙幣の発行により産業振興を図ろうとした由利は、まず大坂でその準備に入る。同年5月には紙幣発行の日が決まったものの、反対論は根強かったため、由利は、「私は覚悟した。（発行されなければ）二条城に保管してある金札に火を付け、自刃する。」と訴え、予定通りの発行にこぎつけた。

【東京】

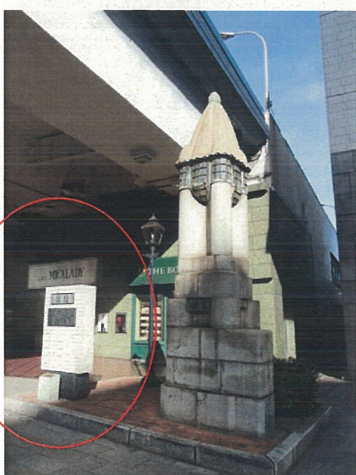
知事公舎も燃えた大火で一念発起



↑戦前の銀座大通り

明治5年2月26日、和田倉門内兵部省から出火し銀座、京橋さらに三十間堀から築地まで燃え広がり、5千戸、28万余坪を焼き尽くす大火となった。由利の公舎も類焼した。この火事をきっかけに由利は東京不燃化計画を作成し、実現を図った。

由利は、当時のニューヨークやロンドンなど、国際都市の目抜き通り並みに銀座大通りを45.5メートルにすべきだと主張したが、大蔵省側の反対にあい、27.3メートルの拡幅となった。



←煉瓦銀座之碑
(銀座一丁目交番)

碑文(拡大)→



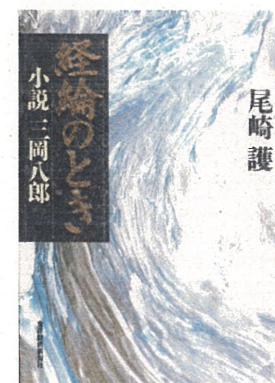
3 幕末期、明治維新时期における由利公正人物評

		由利公正に対する評価
坂本龍馬		<ul style="list-style-type: none"> 2度目の福井訪問の結果を後藤象二郎に宛てた手紙より 「総じて金銀物産等のことを論じるには、この三岡八郎を置いて他に人はいないでしょう。」
西郷隆盛		<ul style="list-style-type: none"> 由利は新政府の殖産興業等の諸改革にかかる莫大な費用を調達するため、太政官札を発行したが、その評価について 「由利公正の金札（太政官札）がなければ、維新はあと数年かかっていただろう。」
木戸孝允 (桂小五郎)		<ul style="list-style-type: none"> 明治2年、由利が会計官（後の大蔵省）を辞した後も早くから由利の中央政界復帰を求める。 「木戸孝允からは戻って来いと手紙が来ているし、先日も国の政体について意見を述べるよう通知があった。（「経綸のとき」）より」
勝海舟		<ul style="list-style-type: none"> 坂本龍馬は勝の命により福井藩に赴き、海軍操練所の設立資金として5千両を調達する。この時の縁により後に龍馬が由利を新政府へ推薦することとなる。 「三岡がよろしいと言えは春嶽公も何も言わないだろう。何しろ、自力で藩庫を潤した勘定役だからな。（「経綸のとき」）より」
グリフィス		<ul style="list-style-type: none"> 明治初期の福井藩に招かれた御雇い教師グリフィスは由利とお互いに居宅を訪問し合う仲であった。 由利が東京府知事になり上京して後のグリフィスの日記より 「東京から速達で手紙を受け取る。三岡からで、私に早く江戸に来いという通知だった。」

4 「由利公正」の生涯を描いた代表的な小説

「経綸のとき 小説・三岡八郎」

著者：尾崎 護 氏



「炎の如く 由利公正」

著者：大島昌宏 氏



